

アスリートが観客に対して持つ意識の質的分析： 男子新体操の事例から

秦 美香子 野田 光太郎

1. 問題と目的

本稿では男子新体操の観客と選手の間には築かれる、見る－見られる（見せる）関係に注目し、とくに「見せる」側にある選手が観客の視線をどう解釈しているかを分析する。

分析に先立ち、男子新体操の見る－見られる（見せる）関係がなぜ問題かについて述べる。表現スポーツと呼ばれる新体操やフィギュアスケートは、選手を「見る」者抜きには成立しない。たとえば陸上競技の場合は、記録は客観的な数値であるため、（公式記録として認められるかどうかは別問題としても）競技者自身が正確な記録を計測することは可能だろう。しかし男子新体操の場合は、たとえば「多様性」や「独創性」の採点を演技者自身が行うことは出来ない。

「多様性」は、「構成は、以下の項目において多様性に富むという印象を与えなければならぬ」（男子新体操採点規則〔2015年版〕第38条、傍点筆者）といった規則によって定められている。つまり、採点が成立するためには「演技の構成に関して何らかの印象を受け取る、演技者以外の人」の存在が必須である。「独創性」も同様で、その演技が独創的かどうかを判断するのは、演技者自身ではなく審判である。

競技の採点基準以外の部分でも、表現スポーツは独特な性質を持っている。しばしば表現スポーツは「競技として行われる以外の場」を持っている。男女新体操でいえば、演技会や発表会などがそれにあたる。新体操の演技会や発表会は、勝敗という概念を持たず、競技ルールも適用されない。野球やサッカーであれば、勝敗が存在しないことは競技の存在意義を揺るがす問題となりえる。対して、新体操では、審判・競技ルール・勝敗の不在によって演技の魅力や面白みが大きく損なわれるということはない。事実、演技会や発表会は選手たちにとって貴重な

実践の場のひとつであるし、観客にとっても競技会に匹敵する魅力を持った場となっている。

演技会や発表会では、審判・競技ルール・勝敗とは異なるものによって、新体操は新体操として成立している。それは、選手（演じ手）と指導者によって表現され、観客によって理解／解釈される、美的なものである。美的感覚が、審判や競技ルールや勝敗というものの代わりをつとめる。表現者と表現の享受者の美的感覚が一致すれば、演技会は成功であるし、そこにずれがあれば、失敗である。

このように、表現スポーツは他のスポーツとは全く異なる。表現スポーツにはスポーツとしての側面とアートとしての側面があり、いずれの側面においても、その核には「見せること」がある。そこで本稿では、見る－見られる（見せる）関係の中でもとくに見せる側に焦点を置き、男子新体操選手による「見せること」の理解を分析することで、表現スポーツのあり方の一端を明らかにすることを目的とした。

俯瞰的に語れば、本稿の試みは、表現スポーツのあり方を、そこに関与する人に注目することで考察する、というものである。この問題意識は、ハワード・ベッカーのアート作品に関する議論に依拠している。ベッカーはアート作品を「たくさんの異なる人々が実行する協調した活動のネットワークを通してそのものになる」集合的なものとして捉え（ベッカー 2008=2016：xi）、アート作品を生産し消費する人々からなる「アート・ワールド」について論じた。アート作品は作者の頭の中だけを頼りに創造されるものではなく、使用される素材、作品が発表される環境、周辺の状況などさまざまな要因が絡み、多くの選択を経て完成するものである。「アート・ワールド」には、出版物の編集者や映画音楽の作曲家といった立場の人々だけでなく、チケット売り場や駐車場の係員といった人々も含まれる。そして、組織化された多くの人々の関与を通して作り出された作品は、また別の人々によって美的な価値が与えられ、消費される。この、作品を消費するオーディエンスも「アート・ワールド」の一員である。

本稿では、ベッカーがアート・ワールドを分析した視線にならって、男子新体操ワールドに注目する。男子新体操も、体操フロアで実施されること、女子新体操

操と並置される競技として制度化されていること、多くは学生スポーツとして学校（中学校、高校、大学）部活動の枠組みで行われていることなど、様々な条件の下で成立している。また、Cirque du Soleilの舞台に取り入れられるなど、より大きな作品の主要素・副要素として、他の要素との絡み合いの中で行われる例もある。その「ワールド」を構成する人々の活動は多様であり、そうした多様な相互行為を通して、男子新体操は作られている。

とはいえ、本稿のみで男子新体操という世界の全てを記述することは出来ない。そこで本稿は、ベッカーの議論では作品を介した間接的関係としてのみ位置付けられていた、作り手と受け手のコミュニケーションという部分にとくに焦点を絞った。そして、コミュニケーションを通して結ばれる個別的・直接的関係を分析することで、男子新体操という世界の特徴を浮かび上がらせることを試みた。

2. 見る－見られる（見せる）関係をめぐる先行研究

人が行うパフォーマンスを介した、見る－見られる（見せる）関係を考察の対象とした研究には、アイドルやミュージシャンとそのファンに注目した研究と、スポーツの観戦や応援に注目した研究がある。

とくに社会学やカルチュラル・スタディーズの領域では、単なる消費者を超え能動的な作品消費を行うファン像や、作品解釈を通して構築されるファンの共同体に光を当てた議論が活発に行われてきた。ただしそうした研究では、オーディエンスやファンについての議論が蓄積されている半面、オーディエンスやファンに見られる対象であるパフォーマーなどに焦点を置いた研究は盛んではない。その主たる理由は、研究の射程がファンとパフォーマーの相互行為ではなく、ファンの側の行動を解明することに絞られているからであると思われるものの、そこにはパフォーマーに対する調査が困難であるといった事情も絡んでいると推測される。

一方、とくにマーケティングやマネジメントの視点から行われたスポーツ研究では、スポーツを見せる側であるチームやスポンサー企業に光が当てられることも珍しくない。その場合には、チームやスポンサー企業の側がどのように観客を

ひきつけるかが関心の対象になる。一例を挙げると町田（2016）では、「スポーツファンとは意図をもって、自ら作り出すもの」であり、「スポーツ経営は、ファン獲得が終着点ではないところに一般のビジネスとは異なる大きな特徴がある」と指摘し、スポーツ経営におけるファン・マネジメントの重要性を論じた。こうした視点から行われる研究は、見せる側（チーム）が見る側（ファン）をコントロールする方向性にのみ関心が向けられるため、アイドル研究などとは反対方向のベクトルで、見る－見られる（見せる）関係に注目しているといえる。ただし、相互関係が関心の対象とならないという点では、両者は共通している。

スポーツをめぐる研究で、見る－見られる（見せる）関係の相互行為に注目するものは、社会学や心理学の立場からいくつか行われている。まず試合中の関係性という点では、一例を挙げると岡澤・柳沢・森田（2002）が、試合中の声援が選手の心理を良い状態にするという調査結果を示している。これは、観客から選手に向けられた声援という行為を、声援を受け取る側の選手への作用という視点から考察しているといえる。

それとは反対の、選手から観客へ、という方向性に注目した例は、杉本（1999）に見られる。杉本の論考は選手と観客の相互作用が主眼とされたものではないが、選手の「スポーツ選手」としての役割演技と、メディアによって生み出されるスポーツをめぐる「感動のドラマ」をそれらしく消費するオーディエンス、という構図の中でスポーツの物語が展開されていることが言及されている。ただし、この構図の中で個々の選手がどのように役割演技を行い、それを消費するオーディエンスをどのように意味付けているかは、杉本の論考の主旨から外れるため、論じられていない。

これらの先行研究では、試合時間中に発生する、観客から選手への、あるいは選手から観客への作用が注目されている。しかし、観客と選手の関係性は試合時間中だけでなく試合の外でも構築され得るものであるため、本稿では試合時間に限らず両者の関係性に注目する。

伊藤他（2008）は、先行研究の概観をもとに、選手の動機づけには個人内要因だけでなく、チーム全体の熟達や、成績に関する雰囲気のような状況要因も、重

要な意味をもつことを示している。同様に北村他（2009）では、とくに日本の選手は親・きょうだい・友人といった近い人々との関わりによって動機づけられていることを指摘している。これらの研究は、選手の動機付けを明らかにする際に、選手と他者との関係性に注目することが重要であることを暗示している。本稿でも、選手の動機付けという視点から、観客やファンを選手がどう理解しているかを分析する。

以上の先行研究の知見をもとに、本稿では選手と観客・ファンの関係を試合時間外の部分でも見てみることに、また、観客・ファンの存在が選手の動機付けにどう関わっているかを見てみることにする。

本稿でいう「ファン」とは、原則的に「選手が、自分たち選手や競技を熱狂的（fanatic）に好んでいるとみなした観客」と定義する。「ファン」には、選手によっては自分に憧れる後輩の選手やジュニア選手なども含まれる場合がある。なお、スポーツのファンをめぐる先行研究では、「スポーツを見る顧客」（町田2016）という広い意味で「ファン」という言葉が用いられる場合もあるが、本稿では「スポーツを見る顧客」全般は「観客」と呼ぶ。

3. 男子新体操ファンに関する検討

本稿は、男子新体操選手と観客・ファンの相互行為に注目している。とはいえ本稿では主に、選手が観客・ファンをどう意識しているか、という部分に焦点を置いた。男子新体操ファンが競技をどのように楽しんでいるかについては、秦・野田（2015）で考察したため、その内容を示しておきたい。

ファンが男子新体操を好んで観るに至った経緯は、テレビなどマスメディアを通して競技を知り、競技会に足を運んでみることで関心を深め、次第に特定の個人選手や団体チームを応援するようになる、という一般的なスポーツ応援行動と共通する流れが見られた。しかし、観客の存在が想定されていないため競技会場に観客席の設定がない、一般来場者であっても関係者と勘違いされるなど、男子新体操の応援はプロスポーツの応援とは大きく異なる部分もある。ファンが居心地の悪さを覚えた、競技会空間に応援という場が築かれていないというエピソード

ドは、競技会や演技会の情報提供が不十分なため応援しに出かけるのも一苦労というエピソードにもつながっていた。半面、それが「演技会などの情報を得るためには出演する当人に聞くしかない」という点において、選手や指導者らとの距離を縮める契機にもなり得ることも語られた（秦・野田 2015）。

秦・野田（2015）において、男子新体操を好む調査協力者たちは、口々に「距離感」の重要性を語っていた。かつては一般観客席が設けられていなかったため、選手に混ざって試合を観戦したり、演技会の情報を得るなどの目的から選手や指導者と個人的に交流したり、という機会が多かったからこそ、選手と観客の間には「客席と舞台の上」を隔てる「見えない壁」（秦・野田 2015：40）があるべきだ、という意識を調査協力者たちは持っていた。観客は個人的に関わることが可能でも「友達」にはならない、というように、一定の距離を観客の側が自立的に確保しているようであった。

観客側がこのように抑制的な応援行動を意識しているのに対して、応援される側である選手や指導者は、観客、とくに男子新体操や特定選手・チームを強く好み応援する「ファン」をどのように見ているのか。以下では「見せる」側である選手の意識に注目し、こうした問題に取り組む。

4. 本稿の意義

先行研究では、スポーツを見ること、スポーツ観戦に没入することの意味が、身体・集団・社会のレベルで様々に論じられている。しかし、これらの先行研究はプロスポーツに主に興味を向けており、大学スポーツなどアマチュアスポーツのファンをこれらと同じようにとらえるべきかどうかには検討の余地がある。同様に、対戦競技ではない体操などの得点競技や、美的要素も対象となる表現スポーツについて同じ議論をあてはめることが出来るかどうかも検討される必要がある。本稿ではアマチュアスポーツであり得点競技である男子新体操を対象としており、こうした必要に応じる研究として位置付けられるだろう。

男子新体操は一般的な認知度が低い競技であり、また主流のスポーツとは異なるものとして周縁化される場合もある。「私たちの多くは（中略）男子が新体操

を演じることに、なにかしらの違和感を抱くに違いない（中略）どんなに優雅でしなやかな踊りを披露することができたとしても、男子新体操の選手たちが『魅力的な男』としてもはやされることはないのである」（阿部 2008：25-26）と断言されてしまうこともあるほど、競技やそれを見る観客の実態は知られていない。しかし実際には、男子新体操の観客は男子が新体操を演じることに違和感を抱いてはいないし、選手たちに魅力を強く感じて「ファン」を自認する者も（その数は、メジャースポーツの比ではないものの）存在する。そうした不可視化されがちな少数の事例に焦点を置くことで、スポーツやスポーツファンの多様性を明らかにすることが本稿の意義である。

5. 方法

調査は2015年3月および6月に実施した。調査方法は半構造化インタビューであり、調査時間はそれぞれ1時間から1時間半程度であった。調査の目的や調査協力者の権利、謝礼などについて事前にLINE上で文章によって説明し、協力を申し出てくれた8名の男子新体操現役選手（A～H）に対して、対面で一对一のインタビューを実施した。A～Fは秦が、GおよびHは野田がインタビューを行った¹。インタビュー時には、競技経験を総合的に思い出してもらうために、競技を始めたきっかけ、競技歴、最近の練習状況などについて簡単に尋ねた後で、競技に対する動機付けを明らかにするための質問（男子新体操をやっていて一番面白いところは何か、なぜ競技を続けているのか、など）や、ファンについてど

注1：野田はA～Hの指導者として毎日指導を行っており、秦は一般教員として彼らに関わることがある。A～FとG・Hの間に回答内容の明らかな差は存在しなかったものの、インタビュアーと回答者の関係性がインタビュー内容に影響を与えている可能性は排除できない。日常的に関係を築いている相手だからこそ本音で語っている部分、指導者の理念や思想を慮って回答する部分、あまり関わりのない教員に建て前で語る部分、利害関係のない相手に屈託なく語る部分などの、様々な影響の可能性が考えられる。そうした可能性を排除することが出来なかった点は、本稿の限界である。

う思うかといった質問を行った。

8名とも競技成績は全国トップクラスで、全国規模の大会で1～3位に入賞した経験を持つ者が多かった。どの回答者に関しても、複数の観客が、彼らの演技に対する感想や、彼らの演技あるいは存在全体に魅了された思いをSNSに書きつづっている。つまり彼らの「ファン」と言っても良いような応援者がいることを筆者が確認している。このことは、本稿の記述内容が、自身の「ファン」を持つ選手の語りによるものであることを示している。本稿の内容は男子新体操選手の意識全体を分析するものではなく、異例な選手の事例を分析したものであることに留意しておきたい。

6. 結果と筆者による解釈

個人が特定される可能性があるため個々のプロフィールは省略するが、8名はいずれも男子新体操を小学生（A、B）もしくは中学生（C～H）の頃に始め、調査時点まで継続していた。大学では、A、B、C、D、Fは個人選手として、E、G、Hは団体選手として競技を行った。

選手にとっての「見せること」

回答者は、「見せること」を競技の根本として認識していた。男子新体操とはどのような競技なのかを尋ねた際、Cは、男子新体操とは「見せるスポーツ」であり、「自分の今出来ることを全部見せて、それが結果になる、特殊なスポーツ」であると答えた。

それは審判に見せるという意味でもあり、観客に見せるという意味でもある。男子新体操をやっていて一番面白いところは何かを尋ねた質問のAによる回答に、そのことが暗示されている。

A：試合に出て、勝つことは第一なんですけど、試合を観たいろんな人に「良かったよ」「かっこよかった」「美しかった」みたいな、そういうことを言われることがすっごううれしくて。（他人だけでなく）親に（言われ

ること) もなんですけど、そのためだけにやっているという感じもあるかもしれないです。

秦：うん、きっと(男子新体操って) そういう競技だよね。人に演技を観てもらおう、っていう。

A：はい。勝つよりも、それがたぶん大事だと思うんです。

Aは全国大会で3位以内に入賞した実力の持ち主であるため、この言葉は負け惜しみなどではない。「勝つことは第一」ということと「勝つよりも、それがたぶん大事」ということがAの中では矛盾なく同時に成立しているのだと思われる。なお、ここでAが言う「それ」には、演技を賞賛されて自分が喜びを感じることと、演技で観客を魅了すること自体の両方が含まれているように取れる。「すごいうれしい」という言葉には、自分が得られる喜びが競技を続ける大きな動機になっているという個人的意味が読み取れる。しかし「大事」という言葉は、この後でフィギュアスケートなど他競技との類似性から競技全体の話(ある意味では恣意的ともいえる、美的な評価基準の話)が続いていることもあり、個人の次元で語られているというよりも、競技者として重視すべきことという、ある種の規範的意識から出た言葉であると推測できる。

同じ質問に対して、Bは「タンブリングとかやってて高さが出たりとか、新しい技が出来たりとか、試合とかでいろんな人に『良かったよ』とか言ってもらえるのが」、Cは「やってて辛いけど楽しいっていうのもあるし、見た人から『良かったよ、かっこよかった』って言ってもらえるのが」、Fは、保護者や関係者などから「『成長したね』とか『うまくなった』とか言われるのが」、男子新体操をやっていて面白いと感じるところだと語っていた。これらの言葉には、Aと同様の意識が表れていると読み取れる。

これらの意見と類似しているものの、Eは、あまり面白いところはわからないと答えた。

E：わかんないっちゃわかんないですね。なんで新体操なのかなって。「タ

ンプリング」といっても器械（体操）の方がすごいし、「動き」といってもダンスの方がすごいし。何が面白いのかなって（以前から）考えていたんですよ。何が面白いのか、いまいちわかんない。

秦：じゃあ、男子新体操を続けてきたモチベーションって？

E：中学校で全国で優勝しちゃってて、そこでなんかけっこう親に期待されるようになって、だから、（親が）期待しているからって。

秦：すごいねー。親の期待に応えよう、なんて私には出来ないかも。

E：いやー、それしか…それしか、逆にないっすね。

Eの回答が上記に示したA、B、C、Fの回答と若干異なっているのは、Eが団体選手であるためと推測される。個人選手とは異なり、団体選手は個々のメンバーに対してというよりも、チームや所属大学全体に対して称賛の言葉がかけられることが多い。個人選手と同様にEも他者からの称賛を励みにしているものの、E自身の演技だけに対して感想が寄せられる機会は少ないため、観客からの称賛ということをあまり意識しなかったのかもしれない。

同じく団体選手であるGやHも、競技の面白みや魅力について回答することは難しいという様子を見せていた。Gは「凄いことを全員で合わせてやるとか、組技を考えて自分たちでやるとか、どういう風に見せてやるとか」が魅力、Hは「試合で優勝した時の達成感が面白い」と語った。またGは「演技終わって、『良かったね』って言われるとき」は「全然、それは嬉しい」と思うものの、「別に率先して言われたいとは思わない」、「自然になんかしゃべる（人）、たまに挨拶してしゃべる人に言われるのはいいんですけど、わざわざなんか寄ってきて、知らない人に『すごいです』みたいに言われるのは…嫌ではないですけど（そこまでは）言われたいとかは思わないです」と述べていた。

団体選手にとっての「見せること」

団体選手は、演技が観客から称賛されることをあまり意識していない様子が見られたが、それは観客の反応に無頓着という意味ではない。団体選手にとっては、

「観客からの承認」は競技全体の活性化という次元に含まれることとして位置付けられているようである。

秦：演技の感想とか言われたことある？

E：演技会だったら、「この前の演技はかっこよかったです」っていう感じはあります。

秦：そういうのは、自分の励みになる？

E：なりますね。やっぱり、新体操はまだちょっと知られていないじゃないですか。だから、本当に初見で格好いいと思われるのかなって若干不安なところがありますし、だから最初から「かっこいい」って言われるのは嬉しいです。

Eはここで「自分の励みになる？」という筆者の質問に「なりますね」と答えているものの、次に語られていることは、E個人というよりも男子新体操という競技にとって励みになる、という意味である。

野田：もっとファンの人に話しかけてほしいか、あんまり関わりたくないか、っていうと…

G：別に、関わりたくないとは思っていません。見てくれる人がいなくなったら僕らも意味がなくなる、わけじゃないですけど、応援してくれる人を大切にしないと何か良くないっていうか、何て言うんだらう…

野田：一般的には良くない？

G：一般的には良くないですね。

野田：本心的にはどうですか？「別にいなくてもいいや」って思うのか、「もっと見に来てください」という感じなのか…

G：どっちかというところ（後者）寄りです。

野田：ファンの人たちのために演技しているんじゃないからな—って感じですか？

G：いや、ファンの方のためだけでもないですけど、見てくれている人たちは楽しみにして来てくれているわけだし、特に〇〇大学とか〇〇大学とかの演技を見に来ていると思うから、それは、それに恥じないような演技が出来るようにという気持ちでやっています。

野田：自分っていうよりもチームを意識するってこと？

G：それは、します。

Gが「見てくれる人がいなくなったら僕らも意味がなくなる、わけじゃないですけど」と言っていることの意味を、「観客がいなければ男子新体操をやっている意味がなくなる、とまでは言わないものの」と理解すると、Gの言う、応援が向けられる「僕ら」とは男子新体操選手全体を曖昧に指した言葉であると考えることができる。そうだとすれば、GもEと同様に、個人的な思いとは別に、応援されることは競技のためにプラスになると考えていると読み取れる。また、Gは「自分の演技」をしているというよりも「所属チームの演技」をしているという意識を明確に持っている。

演技を誰のものと理解しているかが、観客から寄せられる称賛や応援の言葉を誰に向けられたものと理解するかに大きく関わっているということ、団体選手は演技を自分本位ではなくチーム本位で見ているために、観客からの称賛や承認が競技に対する動機付けに深く関わってこないことが読み取れる。

なお、個人選手はチーム単位、競技単位でファンや観客との関わりを見ることがない、というわけではない。こうした違いは、あくまでも競技の動機付けというレベルであらわれた違いでしかない。個人選手も、演技を見せたり競技について知ってもらったりすることで、競技がもっと多くの人に認知され、競技人口が増えるなど活性化されていくことを強く意識していた。競技の活性化に対する意識に差があるわけではないことを述べておきたい。

回答者D

これまでの回答からは、個人選手でも団体選手でも、競技の面白みには、出来

なかったことが出来るようになる、より高次のことが出来るようになる、などといった「達成することの面白み」があることがうかがえた。そして、とくに個人選手の場合には、ここに「他者に見せることの手応え」あるいは「他者からの承認」が重要な要素として加わるが、団体選手の場合は、観客からの称賛ということがそれほど意識されていないことがわかった。

こうした競技理解や観客との関わり方の差は、必ずしも個人選手と団体選手という違いに還元できるものではない。ここで、他の回答者とは比較的異なる回答を行ったDの語りを見てみたい。

Dが競技を始めたきっかけは、中学校の時に先生に才能を見込まれたためだった。先生の熱心な勧誘により競技を始め、初めて出場した試合は最下位と「やばい」レベルであったものの、続けていた。後に大学で指導を受けることになる(当時)選手の演技を初めて観た際、「なんだあの独特な演技は」、「あれをもっと間近で見たいなって思って」進学先の大学を決めた。

少なくとも高校の時点では、既に試合で良い成績をおさめていたことと思われるが、上記の語りの内容に暗示されている通り、Dにとって他者からの称賛はあまり動機付けに関わっていないようだった。男子新体操の魅力などについて語る際にも、他者からの評価というよりも自分自身の個性の表現という部分を強く意識している様子が見て取れる。

秦：男子新体操の魅力って何？

D：単純に、人の出来ないことを出来るっていうのが(魅力)。これはもう、ずっと1回生の時から思っているんですけど、「絶対に人と同じようなことをしない」って。自分流を作りたいって思ってやっています。(他の人の)衣装とかは、参考にはすると思うんですけど、人の演技って映像もあんまり見ない。自分流を作ることがいいんで、誰かの見たらパクっちゃいそうじゃないですか。あと、「こんな技あったなあ」って思う技は(大体)もう既に(誰か他の人が)出来ていたりするんで、なので自分で考えたい。みんな同じ手具操作とかしてますからね、これは絶対にやっていな

いだろうっていう技を作るんです。

秦：そっか。「男子新体操は多様性があるところが特徴だ」って言われているじゃない？（ダンスや器械体操など）いろんなジャンルの要素が入ってるって。男子新体操はそういう競技だから、いろいろなことが出来るって感じかな？ そう思う？

D：むしろなんか、（男子新体操は）いろんなものに転換できるんですよ。身体を万能型に鍛えていかないといけないんで。柔軟性もあり、筋力もあり、みたいな。だから（身体を）いろんな面に使えるっていうのがあるんですよ。

競技についてこのように語る部分からは、Dが男子新体操の特性に高い関心を持って取り組んでいる様子がうかがえる。

Dは観客からの視線に無頓着な訳ではない。男子新体操について感想を書いている人をウェブで見つけた時は「けっこう嬉しい」、とくに自分自身の演技について感想を書かれると「もう、『お気に入り』を押します」と屈託なく喜び、大きな会場で観客席がガラガラだと「やる気が減りますよ」と言う。しかし観客の反応は、自分が演技を行うことや競技を続けることの核の部分には含まれていないようだ。

D：（観客席は）大ざっぱにしか見ないんで。

秦：「いっぱい（人が）入ってるなあ」とか？

D：はい。あと、いま会場のここに立っている、っていう実感を得たりとか。

（中略）

D：ファンの方は多分、「動く美術館」を見に来ているんですよ、簡単に言えば。

秦：スポーツを観る、っていうのと違うんだね。

D：はい、たぶん、作品を観に来ているんですよ。「動く美術館」だと思うんです。

他の回答者も一様に、観客席はほとんど視界に入っていないとは言っていたものの、Dの回答は単に観客の存在を意識しないということとは少々異なるように思われる。Dにとっては「自分が演技を見せる」－「観客は演技を見る」という確固たる一方向的な関係があり、演技を見る観客の能動性（＝演技を「見られている」という自分の側の受動性）はあまり意識していないようだ。

Dの回答からは、男子新体操選手と観客との関係のあり方が一様ではないことが見えてくる。他の回答者の回答からは、個人のレベルであれチームや所属大学のレベルであれ、演技を見せる、見られることが、動機付けになったり規範意識を強めるきっかけになったりする、という、視線のやりとりによる相互作用を通して形成されていく表現者像が見てとれた。しかしDの回答からは、より絶対的な表現者像が浮かび上がってくる。

演技が語られること

観客やファンが演技を「見ること」には、演技について語る事が隣接している。秦・野田（2015）でも、ファンたちが演技について感じたことを言語化する喜びや、それをファン同士で共有することの楽しみが語られていた。ファンが作品を解釈し、それを表現することについては、ファン活動の重要な部分として多くのファン研究が指摘するところでもある。そういったファンの語りを回答者たちはどうとらえているのかについて、触れておきたい。

先述したとおり、とくに個人選手にとって、ファンの肯定的な語りは動機付けになるほど重要なものである。また団体選手も、個人的な動機付けに引き寄せるほどではないものの、競技のために喜ばしいこととして理解している。しかしそのように感じるのは、自分自身が一定程度以上満足できた演技に対する称賛や簡単な感想に対してであって、それ以外の語りについては、回答者たちはより複雑な感情を抱いている。

順位が良かった時と悪かった時では、観客やファンからの感想に対する受け止め方に差が出るかを尋ねた際の回答には、いくつかのパターンが見られた。まず、あまり差はないという回答は以下のようなものである。

C：インカレはやっぱりちょっと気にしましたが、それ以外の大会はそんなに順位を気にせずにやっていたので、「ミスったけど、ここは良かったよね」とか言ってくれた人は、良かった部分をちゃんと見てくれているんだなと思って、そこは伸ばしていけるし、そこはダメだったって自分でわかるので反省しながら練習できるので、気にしないですね。

Cの言葉に示されているように、良いところを見出してくれる感想は試合の結果に関わらず嬉しいものとして認識されているようである。同様の回答には、「ちょっと失敗しても、『失敗したけど、動きとか良かったよ』『タンブリングは良かった』みたいなのは言ってもらえます。嬉しいです」（回答者B）、「（順位が悪かったときのファンからのコメントも）今後にかせるものがあったら取り入れます」（回答者D）というものがあつた。

ただ、それは声かけられるタイミングによる。演技直後の声かけは、とくにその演技が不本意だった場合には、望ましくないものと見なす回答者もいた。

G：なんて言うんだろう…話しかけてほしくないっていうか、自分の「失敗した」という気持ちが、たぶん演技終わった直後だったらまだ整理がついていないから、そこに人が入ってこられるのはちょっと嫌かな。ちょっと落ち着いて、いくら悪い演技だったとしても、ちょっと落ち着いてだったら別に…

（中略）

野田：「何も話しかけないで」と？ 失敗した後だと恥ずかしいし「話しかけないで」みたいな？

G：ちょっとあります。恥ずかしいって（いうのは）、自分が悔しいのと、人に見られて恥ずかしい…

野田：混ざり合ってる？

G：はい。

H：(演技が)良くなかった時にしゃべりかけてきたら、空気読めない人なんだなって思います。

野田：でも内容が「惜しかったね」とかだったら？

H：お母さん方とかだったら、(Hは今話しかけてほしくないと思っていることが)わかるんじゃないですか？

野田：ファンの方とお母さん方で、違うの？

H：うーん…

Hはこの後の部分では、順位の良し悪しに関わらず、長々と話しかけてくる人は苦手だ、と述べている。ただ上記の部分では、演技が不本意だった際に話しかけてくる人を「空気読めない」と表現しており、G同様に、演技者の気持ちを慮って放っておいてほしい、という気持ちを持っていることがわかる。

一方、タイミングの問題ではなく同情が寄せられるという意味において、あまり好ましくないと受け止める者もいた。

秦：順位悪い時はコメント書かれないとかある？

A：ありますねー。

秦：失敗したときに、なぐさめるコメントとか。

A：ファンの人にやってほしくないですね。それはまあ、嬉しいんですけど、なぐさめられたって感じるとちょっと嫌ですね。

E：(順位が)良かった時は、やっぱり「良かったよ」って言われたら、そりゃ嬉しいじゃないですか。でも高校の時とか、僕のミスで負けているんですけど、そういう時にも…まあ、それは、純粹に「かっこよかったよ」って言ってくれているのかもしれないんですけど、こっちとしては、同情じゃないですけど「君のせいじゃないよ」みたいな感じに聞こえてくると情けないっていうか、そういう気持ちになるっていう。

秦：なぐさめられているみたいな気持ちになる？

E：あ、そうです。

これらの回答からは、不本意な演技について語られたくない気持ちは、演技に対する感想ではなく同情の言葉が寄せられることへの抵抗と読み取れる。演技そのものではなく演技を行った人物に対する言葉がかけられることへの拒否的な感情ともいえるだろう。

演技が満足いったかどうかに関わらず、演技に対する批判的なコメントが寄せられることについては、より否定的な態度が見られる。

F：それ（批判）は別に、（書いた人が）自分で思っておけばいいことで、ネットで書くことではないと僕は思うので。

秦：自分以外の人のことでも？

F：あります。嫌ですね。

多くの人の目にふれるSNS上で批判的なコメントが書かれることに対する否定的な意見は、第一にはSNS上で他者を悪く語ることへの否定的な意見と考えられる。ただそれだけではなく、演技に対して第三者が細かく語ること自体への否定的な見方である可能性もある。

G：うーん…まあ正直…なんていうか、（演技を）見て「すごいねー」ぐらいならいいんですけど、なんかその、見てる…見てるだけって言うのはあれですけど、（競技を）やってもいない人に何かいろいろ言われるのは嫌です。

野田：ああ、細かいところまで？

G：はい。なんか…あそこがなんちゃら、みたいな。

野田：ああ、「そんな本当にわかっているのか」と？「そんなふうになんか評価をされてもね」っていう感じがするの？

G：はい。

このGの語りからは、自分自身は演技を行うわけではない、ただ演技を観るだけの観客やファンが、詳細に技術的な部分を語ることへの抵抗が読み取れる。別の部分では「『ここ、こうした方がいいんじゃないの?』とか（言われると）、それはマジでムカつきます」とも語っており、演技を「見せる」意識を強く持っていることがわかる。

こうした言葉は、「見る」側からの感想が語られることへの否定的感情があらわれたものではない。Gが、プライドと専門性を持って演技を行っていること、演技はあくまでも「見せる」側のものであり、「見る」側に主導権を奪われるのは嫌だという意識を持っていることが表現されたものと考えられる。

演技以外を「見せること」

次に、演技ではなく選手個人自身が見られる、という部分を取り上げる。とくに成績上位の選手は、試合を観た観客やその選手のファンからSNS上で言及されたり、本人に向けて直接コメントを書かれたりすることがある。その内容は演技についてのものが大半であるが、選手の外見や性格的な魅力について書かれる例もある。

観客からの称賛や承認を重視する／しないにかかわらず、演技以外の部分が見られることや個人の外見や人格について言及されることに、回答者たちは抵抗を感じていた。

大学生は一般的に、自身のSNSアカウントを非公開にしたり、知らない者からの友達申請が来ても無視したり、という対策を取っている者が多い。回答者たちも、複数のSNSを対外的な用途と私的な用途にわけて利用していると語っていた。複数の回答者が、対外的に使うと決めたサービスについては新体操関係者や男子新体操ファンと広くつながり、私的に使うサービスはアカウントを非公開にして友人のみとつながる、というようにSNSを使い分けていた。また、とくに対外的なアカウントでの発言内容は、大半の回答者は極端な内容や汚い言葉遣いを避ける程度は気にしていると答えた。

秦：演技をしていないときに、自分は男子新体操選手なんだ、と思って気を付けていることはある？

A：会場だったら「〇〇大学」と（自分の大学名が）書いてあるので気を付けますが、普段かあ…普段は、変なことしちゃいけないっていうのはあります。たとえば逮捕されるとか、喧嘩するとか、そういうのは嫌ですね。

（中略）

秦：SNSは？

A：Facebookだと「友達（※Facebookの用語）」がいっぱいいて、（そこには）普通の友達もいますし、先生もいますし、だから馬鹿なことは書かないとか、きれいな言葉を使うとか。

Bも、Aと同様のことに気を付けていると語った。

秦：演技をしていない普段のときに、自分は男子新体操の選手だから人に見られている、ということ意識したりする？

B：僕はしますね。

秦：それは、どういうふうにな？

B：男子新体操選手として恥なことは出来ないじゃないですか、やっぱり。普段の生活とかで。

秦：礼儀正しくする、とかそういうこと？

B：そうですね、挨拶とか。

個人選手であるBは「男子新体操選手として」という言葉を用いたが、この質問に関しても、やはり個人選手と団体選手の意識には多少の違いが見られる。団体選手であるGは、競技全体のイメージということ語っていた。

G：（心の中で）思っても他の大学の悪口とか言わなかったりとか…

野田：それは何でかな？

G：何か、あんまり良くないかなって。

野田：イメージが下がってはいけない、みたいな？

G：はい。

野田：自分たちの点数にも響いてしまうって感じ？

G：いや、っていうよりは、見てくれている人にはそういうイメージで僕たちのことを見てほしくないっていうか。けなしあってるっていうか。

野田：ああ、男子新体操の中で何か（仲違いのようなことを）やっているな、って他の人に思われたくないってこと？

G：はい。

野田：それは、男子新体操のイメージの全体が悪くなってほしくないっていう感じ？

G：ああ、そんな感じですね。

SNSの発言が競技イメージに影響を与えるリスクを回避したい、というGの考えは、同じく団体選手であるEにも共通している。Eの場合は、とくにそれが後輩に対する影響として意識されていた。

秦：ツイッターとか書くときに、男子新体操選手だから、と思って意識します？

E：あー、多少は。変なこと書かないようにとか、その程度なんですけど。あと、今年の演技はこんな感じでいこう、とかそんなのは絶対書かないようにしています。練習がキツイとかも書かないようにしていますね。（そういうことを）書いて、「〇〇大学の練習はキツイんだ、じゃあ〇〇大学には行きたくない」っていう人も増えるかもしれないです。

秦：高校生の子とかに見られたときのことを考えて、ってこと？

E：はい。

競技界の一員として、あるいは所属チーム（所属大学）の一員として、ネガ

ティブな情報の発信源にならないように気を付けている様子が見て取れる。

次に、SNS上で情報を発信する際ではなく、コメントなどを受け取る際の意識について見てみたい。前述したように、選手は自分たちの演技を見られることを重要なことと考えたり、嬉しいことと感じたりしている。多くの選手にとって試合とは、極限的な集中力によって自身の力を出し切ることが要求される、自意識のスイッチを切り替えて臨む場であると推測される。そういうものである試合で演技を他者に見せ、他者から称賛を得ることは、大きな喜びや動機につながる。しかし見られることが喜びにつながるのは、あくまでも演技に限定されることであり、個人としての彼らが他者からの承認欲求を強く持っているわけではない。

F：普通の人なんで、そこまで（普段の学生という部分まで）見られてしまったら嫌ですね。

秦：大学生の自分と演技中の自分は違う感じ？

F：練習中とかは自分がいっぱい出るんですけど、（試合で）演技するときには、なんかちょっと違います。切り替えます。

演技中の自意識と、練習中や大学生活を送っているときの自意識は異なるために、後者の方に注目されることには抵抗を覚えると語るのは、Fだけではない。

B：試合後とかに、なんか結果とか（SNSに）書いたときに、（演技について）「前のときに比べて、ここはこうだったから良いよ」とか言われると、いつも見てくれている人とかじゃなくても、ああちょっと変わったんだなあとか（思えて）僕は嬉しいんですけど、なんか普通の、普段の生活とかに（ついて書いたことに）反応されるのは、ちょっと…

秦：そうだね。でもファンの人たちにとっては、そういう普段の生活とかも…

B：そうですね。逆の立場だったら分かるんですけど。

A：知らない人から、A君は何とか…って（ネット上に）書かれるんですよ。「（演技が）カッコいい」とかは別にいいんですけど、キャラが何とか、みたいなことを書かれると怖いんです。

秦：ああー、人柄とか、演技じゃないところを書かれるっていうこと？

A：はい、新体操関係ねーじゃん、って思って、ちょっと怖いんですね。

BやAは演技を見られることや誉められることが大きな励みになると認識しており、演技に関して観客やファンとコミュニケーションを取ることを抵抗なく行っている。ただしそれが演技外の部分にまで侵食してくると、困惑や恐怖を感じるようだ。直接引用は控えるが、ちょっとした差し入れの程度を越えた高価なプレゼントを贈られたり、個別に食事に誘われたりする場合にも、演技ではなく選手自身に対する関心の高さが感じられるため「怖さ」を感じる、と語る者もいた。

なお、こうした感情もまた全員に共通するものではない。Dは大学生活の様子がネット上で語られたり、画像がアップロードされたりした場合にどう思うかについて、「別に。普段の大学（生活）ですよ。別にいいです。違う一面で、いいんじゃないですかね」と語っていた。演技中と普段の自己が違うことは意識しているものの、異なった両方の自分を見せることに頓着しない者もいることがわかる。

さらに別の意見として、SNSでのやりとりを批判的に見るまなざしもある。演技以外の部分で観客やファンに好まれようとする態度を否定的に見るまなざしである。観客やファンにおもねる態度を取ることへの否定的な意識は、ファンサービスは何かを尋ねる質問の回答として主に語られた。すべての回答者がファンサービスは必要でないと考えており、そのような態度を恥だと語る回答もあった。

秦：ファンサービスって大事？

E：いや、僕はそんなのは大事だとは思わない。まだまだ競技自体小さいんで、ファンサービスとなれあいが区別つかなくなりそうじゃないですか。

現になんかこう、他の大学の人とかも、ファンらしき人とツイッターでずっと、みんなに見えるところでやりとりとかしてて、それ見てるとなんか格好悪いなあって思う。

秦：その格好悪さって、どんな格好悪さ？ 媚びてる、みたいな感じ？

E：媚びているというか…なんて言うんですかね。なんて言えばいいかわからないんですけど、なんか格好悪いですね。女の子好きなんだろうなあって。あわよくば、みたいな感じで思っただけじゃないのかな、とか。そういう下心とかを考えると、やっぱり恥ずかしいですね。別に「応援メッセージ来ました、ありがとうございます」だけでいいのに、いろいろ書いているのを見ると、同じ新体操選手として恥ずかしくなります。

秦：じゃあ、なれあいみたいにならずに、「応援してるよ」「ありがとう」ぐらいの感じが一番好ましい？

E：はい、僕はそう思います。

こうした行動はそもそもファンサービスではない、という回答も見られた。

秦：ファンサービスって大事？

A：僕は、しなくていいと思います。それはプロがやるものであって、僕らは学生で、部活をやっているんで、ファンに対して、とかはしなくていいと思うんですよね。純粹に、謙虚に、新体操をやっていればよくて、それにファンの人がついてくれることはあっても、ファンを作るためにやっているわけではないので。

秦：観客はもっと増えた方がいいでしょう？ でも、増やすっていう感じじゃないのかな。

A：(増えた方が) 嬉しいですよ。でも、「(試合に) 来てください」とかってチラシ配ったりするわけじゃないんで。いや…いるんですよ、そういうファンサービスするような奴も。たとえば演技会とかでも、終わった後に投げキッスするとか。(でも) ファンの人たちは、「演技を観に来てく

れてありがとう！」とかやってるパフォーマンスを観に来ていないわけじゃないじゃないですか。演技を観に来てくれているのであって。そこ（演技）のファンになったわけで、手を振っている奴のファンになったわけじゃないんで。だから、そこはファンの人も求めていないと思うんですよ。演技することがファンサービスです。

こうした発言からも、選手がファンや観客と自分たちとの関係性を、「ファン・観客」と「自分（選手）」との関係というよりも、「ファン・観客」と「(非人格的な)演技」との関係として理解していることがわかる。

7. 結論

回答者の語りから、とくに個人選手は競技に対する動機付けの一部に、演技によって他者を魅了するということや、他者からの称賛によって喜びを得るということ、つまり「見せること」が含まれている様子が見られた。団体選手の場合は、「見せること」は競技の活性化とつながる意味で理解しており、動機付けにはあまりつながっていないことがわかった。

動機付けにつながる／つながらないという違いがあるにせよ、個人選手にとっても団体選手にとっても、演技に対する観客の語りは基本的には喜ばしいものとして認識されていた。ただし、不本意な演技に対する語りや、演技ではなく選手自身に向けて語られる際には、それはあまり聞きたくないものとしてとらえられていた。また、演技に関する技術的な評価や批判的な語りは、発言してほしくないことと見なされていた。

演技を見せる1分半あるいは3分以外の場面では、回答者たちは競技イメージの低下や所属チームのイメージの低下につながる言動を「見せる」ことは回避しようと気を付けており、練習中の姿や普段の大学生としての姿など、演技に直接関わらない部分について「見せる」意識は持っていなかった。そのような部分が「見られること」については、拒否感を覚える者、頓着しない者の両方がいたが、

普段の自分を見られることに何らかの有益な意味を見出す者はいなかった。演技以外の部分を「見せる」者に対しては、批判的な意識を持つ者もいた。

本稿の分析結果からは、選手は見る－見られる（見せる）関係を、観客・ファンと選手の間に構築されるものではなく、観客・ファンと演技の間に構築されるものとして理解しているということが浮かび上がった。それゆえに、観客・ファンと選手自身の間に関係が成立していると認識することを否定的にとらえる様子も見て取れた。

見る－見られる（見せる）関係は、観客・ファンと選手の間にだけ築かれるものではなく、選手と保護者、選手と指導者、選手と審判、選手と選手の所属する学校の関係者など、多様な次元で築かれるものである。とくに、選手と観客・ファンとの関係性に影響を与えると考えられるのが、選手と指導者の間に築かれる、見る－見られる関係である。指導者が選手のふるまいをどう認識し、指導しているかによって、選手が観客やファンをどのように理解し、どのような態度を取るかは変わってくるのが考えられる。こうした複雑な関係の絡み合いについて検討することが、今後の課題となるだろう。

文献

阿部潔、2008、『スポーツの魅惑とメディアの誘惑——身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社

伊藤豊彦・磯貝浩久・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・渋谷崇行、2008、「体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の現状と展望」『島根大学教育学部紀要（教育科学）』42、13-20

岡澤祥訓・柳沢隆裕・森田 泰行、2002、「第46回卓球世界選手権大阪大会における応援プロジェクトに関する研究」『教育実践総合センター研究紀要』11、43-50

北村勝朗・齊藤茂・永山貴洋、2009、「教育情報を取り巻く文化・社会的文脈がスポーツ選手の動機づけに及ぼす影響——日本、中国、韓国、ブラジルのスポーツ選手の熟達化過程を対象とした質的分析による日本人に特徴的な動機づけ特質の検討」『教育情報学研究』8、1-10

秦美香子・野田光太郎、2015、「『男子新体操の社会学』に向けて——観客の語りから見る男子新体操界」『女子学研究』5、31-46

Becker, Howard S., 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary Edition, The University of California Press. =2016、後藤将之訳、『アート・ワールド』慶応義塾大学出版会
町田光、2016、「変貌するスポーツファンをマネジメントする」早稲田大学スポーツナレッジ研究会編『スポーツ・ファン・マネジメント』創文企画

